

# Soul of The MOMOTAROU



おかだ ひと

いつも算慈は朝、暁七ツ半（五時）に起きて、かまどに火を入れる。他の者たちより早起きだ。算慈は寺子屋の先生をしている。算慈の住んでいる裏長屋から歩いて十五分ほどの秀徳寺で、子供たちに読み書きを教えている。算慈の顔は生まれつき赤いので「桃太郎先生」と、子供たちから慕われている。

ご飯が炊き上がり、味噌汁とたくあんが今朝の朝餉だ。かまどの火が消えたか再確認してから、朝餉を食べ始めた。

外から納豆売りの声が聞こえてきた。もうそろそろみんなが起き始める時間だ。算慈は食べ終わった食器を洗い、箱膳に閉まった。算慈の家の前には井戸があり、女たちの声がよく聞こえる。

算慈は顔を洗い、歯を磨き、水がめに水を入れるために、桶を持って外に出た。冬の冷たい空気が全身を包み込む。

「先生、おはようございます。」

井戸に水を汲みにきた女が声を掛けてきた。弥七の母親だ。

「おはようございます。」

算慈は水を汲むのを手伝った。

「今朝は寒いですね。」

「そうですね。」

「弥七ったら、今日は寺子屋に行きたくないって言うんですよ。」

「弥七君が？どうかしたんですか？」

「きのう、先生に怒られたからですって。」

「ああ、女の子にちょっかい出したんですよ。」

「そんなことだろうと思いましたわ。全く、あの子ったら。尻叩いてでも行かせますから。」

「はは、待ってますよ。」

「先生、ありがとう。じゃあ、お先に。」

算慈はつるべで冷たい水を汲み上げ、桶にあけた。朝日がまぶしい。家の水がめに移しかえ、出かける準備をした。

寺子屋は昼まで終わる。今日も授業が終わった。

「先生、さよなら。」

「さようなら。」

寺子屋に来ていた子供たちが帰っていった。算慈は照山和尚の部屋に挨拶しに行った。

「和尚様、失礼します。」

「算慈か、入りなさい。」

「はい。」

障子を開け、算慈は和尚の部屋に入った。

「算慈よ、お前いくつになった？」

「二十五歳でございます。」

「早いのお。お前がこの寺の前に捨てられてから、もう二十五年か。」

「はい。和尚様に育てていただいて感謝しております。」

「算慈を捨てた親も何か事情があったのだろう。頬が赤いそなたをみなが桃太郎と呼んでいたころが

懐かしいわ。」

「そうですね。いまだに頬は赤いままで。」

「子供らに桃太郎先生と慕われておるわい。」

「はい。」

「今日は白菜をたくさんいただいた。算慈も持って帰りなさい。」

「ありがとうございます。」

和尚から白菜を包んだ風呂敷を渡された。

「もう帰っていいぞ。」

「では、失礼します。ありがとうございました。」

算慈は部屋を出て、寺をあとにして裏長屋に戻ってきた。

「桃太郎先生！」

子供たち数人に囲まれた。皆、同じ裏長屋の子供たちだ。

「どうした？」

「何、持ってるの？」

「白菜だよ。分けてあげるから、私の家に来なさい。」

「わーい。ありがとう。」

子供らがついてきた。

「母ちゃん、喜ぶよ。」

「そうだね。」

六畳一間の算慈の家は井戸の向かい側にある。子供たちが先に家に入った。算慈は包丁を取り出して白菜を四等分し、子供たちに分けた。

「ありがとう、先生。」

「ああ、いいよ。」

子供たちは飛び出ていった。すぐに母親たちが礼を言いに来た。

冬の寒い時期であった。吐く息も白い。湯屋から戻る途中、算慈は家主に家賃を払いに行った。

「こんにちは。算慈です。家賃を払いに来ました。」

「おお、算慈。待っていたぞ。」

「何か？」

「今日な、大家さんの使いのものが来て、算慈が来たら顔を出してほしいと頼まれたところじゃ。」

「大屋さんが？」

「ああ、何か大切な用事があるらしい。最近、大家さんは体調が悪くてな。」

「そうなんですか。」

「医者に診てもらっても、一向によくならないらしい。明日、仕事が終わってからでいいから、ちょっと顔を出してくれないか。」

「はい、わかりました。」

翌日、算慈は寺子屋が終わってから、大家のところに向かった。

(大切なこととはなんだろう?もしかして私の生い立ちがわかったのだろうか。)

算慈は今までの人生を振り返った。

二十五年前の春の早朝、生後半年ほどの算慈が産着のまま、大きなかごに入れられ、秀徳寺の前に捨てられているところを小坊主に見つけた。頬が赤かったことから、照山和尚は「桃太郎丸」と名付け、寺で育てることにした。

やがて、桃太郎丸は成長し、寺にある寺子屋で読み書きそろばんを教えられた。そして、十五になった時、「算慈」と名付けられた。照山和尚は僧になることを勧めた。しかし、算慈は親に捨てられたということもあり、家庭を持ちたくて僧になることを固辞し、裏長屋で住むことにした。そして、秀徳寺に通い、寺子屋の先生として生計を立てることとした。

身寄りのない自分を育ててくれた照山和尚には大変感謝していたが、自分の親を探し出そうとしていた。唯一の手がかりは、算慈の着ていた産着が絹で出来ていたことであった。照山和尚はどこか身分の高い子供だろうと話していた。

算慈は休みの日には、捨てられていた時に着ていた産着を持ち、大きな呉服屋や古着屋を尋ねて歩いた。しかし、産着の出はなかなか見つからない。年を重ねるごとにつれ、自分の両親のことを探すのを諦め始めていた。

(なぜ、私は捨てられたのだ。)

算慈はよく苦しんでいた。しかし、裏長屋での生活はそんな思いをよく打ち消してくれる。算慈の住んでいる裏長屋では算慈を家族のように受け入れてくれる。ありがたいことだ。いずれ、算慈も妻を娶って、幸せな家庭を持とうと思った。

大家の家に着いた。

「大家さん、失礼します。算慈です。」

「どうぞ、お入りになって下さい。主人が話しがあるとかで。」

「はい。おじゃまします。」

奥方について、算慈は廊下を歩いた。奥座敷に大家は寝ていた。

「あなた、算慈さんよ。」

「ああ、あれを持ってきてくれ。」

大家はしゃがれた声を出し、体を起こした。

「具合はいかがですか？」

「もう、だめだな。」

「そんな。」

「算慈に頼みたいことがあるのだ。」

「何でしょうか？」

奥方が細長い筒を持ち、部屋に入ってきた。

「悪いが日本橋の大徳寺の和尚に、これを渡してきてほしいのだが。」

「はい。」

「今日にでも行ってほしい。」

奥方が筒を算慈に手渡した。すると、その筒はまばゆく光り輝いた。

「これは、何ということだ。」

「何ですか、これは？」

光は徐々に消えていった。

「もしや、算慈、お前は……。ああ、私はもう出歩けない。算慈なら信用できる。和尚にその筒を渡してきてほしい。」

「かしこまりました。」

「和尚はその筒のことを知っている。渡すだけでいい。頼んだぞ。」

「はい。」

算慈は筒を持って部屋を出た。ここから歩いて日本橋の大徳寺まで歩いて、一時間ちょっとかかる。まだ昼過ぎなので夕方には戻ってこれるだろう。

(しかし、この筒はなぜ光ったのだろうか?)

算慈は不思議に思った。

大家の屋敷を出ると、すぐに子供たちが集まってきた。

「先生！」

「それ何？」

「これは大事な預かり物だよ。」

「遊んでよ。」

「今から日本橋まで行かねばならんのだ。」

「そんなぁ。」

「また明日、遊ぼう。」

「はーい。」

「先生、気をつけて行ってきてね。」

子供たちは走り去っていった。

「さて。」

算慈は小雪のちらつく中、日本橋へ向かった。

小一時間ほど歩き、大徳寺に着いた。寺の境内で掃除をしている坊主を呼び止めた。

「こんにちは。算慈です。観人和尚に森岡の八兵衛様よりお届け物を持ってきました。」

坊主は、どうぞと言い、算慈はついていった。算慈の拾われた秀徳寺と大徳寺は同じ宗派で仲が良い。算慈も照山和尚にお供して何度か来ている。

「観人和尚様、ご無沙汰しております。」

もう七十歳近い観人和尚のしわだらけの顔が笑った。

「やぁ、算慈。久し振りじゃなお。元気にしとるか？」

「はい。変わりありません。」

「今日はどうしたのじゃ？」

「森岡の八兵衛様よりお届け物がありまして、これを。」

算慈は観人和尚に筒を手渡した時にまた、筒が光り輝いた。

「これは・・・。光ったではないか。」

観人和尚は筒を受け取り、中身を取り出した。布にくるまれた一振りの刀が出てきた。

「刀だ。」

算慈は驚いた。

「この刀は・・・。八兵衛はなんと申ししていた？」

「これを観人和尚様に渡したらわかると。八兵衛様は最近、体調が思わしくないようで。」

「ふむ。」

観人和尚は目をつぶり、しばらく考えた。

「算慈や。お前に頼みがある。最近、宿場の戸塚に夜な夜な鬼が出て、旅人を襲うのじゃ。最初は村の農民を襲っていたが、しだいに町の方へ出てきてな。旅人をさらって喰うそうじゃ。」

「鬼が出てくるのですか？」

「そうじゃ。背丈七尺（約二メートル）ほどの大きさの鬼じゃ。赤いのやら青いのやら、とにかく、今、戸塚は危険じゃと旅人は申しおる。」

「そうなんですか。私に頼みというのは？」

「先程、この刀が光ったであろう。」

「はい。八兵衛様のところでも光りました。」

「この刀は妖刀サスケといってな、八兵衛の家に代々伝わるものじゃ。刀が使うものを選ぶという。この刀は人を切れぬ。鬼しか切れぬ。恐らく先程、刀が光ったということは算慈を選んだのかも知れぬ。この刀を持って戸塚に行き、鬼退治をしてきてほしい。」

「私がですか？ 私には武芸の心得がありません。」

「この刀は生きておる。鬼の血を求めておる。自在に動くのじゃ。武芸の心得などなくとも使いこなせる。頼む、算慈。」

ここまで観人和尚に頼まれると、算慈は断れなかった。果たして、自分に鬼退治などできるのか。しかも一人で。算慈は腹をくくった。

「わかりました、観人和尚様。鬼退治に行きます。」

「よかった、頼んだぞ。これを旅賃の足しにしてくれ。」

観人和尚は懐から一両取り出して、算慈に渡した。

「こんなに。」

「いや、何かと物入りじゃろう。町人のために受け取りなさい。」

「・・・、わかりました。ありがとうございます。」

「罪なき民を救ってくれ。江戸の町中では刀を出してはならぬから、この筒に入れておくのだぞ。」

「はい。では、明朝一番に戸塚に向かいます。」

「照山和尚には今から私が手紙を書く。少し早いけど夕餉を食べていってくれ。」

「わかりました。失礼します。」

算慈は筒を持ち、廊下に出ると、先程の坊主が別室に案内した。しばらくすると、坊主が夕餉を運んできた。

「ありがとう。」

坊主は礼をして出て行った。算慈は夕餉をいただいた。

食べ終わり、部屋で待っていると、観人和尚が入ってきた。

「あ、観人和尚様。ごちそうさまでした。」

「いや、お待たせした。これが手紙じゃ。照山和尚に渡してくれ。」

「確かに。」

「ご苦労であった。では、鬼退治頼むぞ。」

「必ず、退治してまいります。」

算慈は筒を持って立ち上がり、一礼してから部屋を出た。外は夕暮れ時であった。

辺りが暗くなった頃に、秀徳寺に着いた。寺の正面の門は閉められていたので、横の入り口から入った。

「夜分、すみません。算慈です。」

照山和尚が出てきた。

「どうした、算慈。」

「先程、大徳寺に行ってまいりまして、観人和尚様から手紙を預かってきました。」

「そうか、まあ、上がりなさい。」

「失礼します。」

算慈は、照山和尚の後について座敷に上がった。照山和尚が手紙を読んでいる。顔つきが険しくなってきた。

「そうか、戸塚ではそんなことになっておるのか。算慈、大丈夫か？」

「うまくいくかわかりませんが、この刀を信じて鬼退治に行ってきます。」

「うむ。寺子屋のことは私に任せておきなさい。明朝、旅立つのじゃな。」

「はい。朝七ツ（午前四時）には旅立とうかと思います。」

照山和尚は懐から一両取り出した。

「これを旅費にきなさい。」

「いえ、観人和尚様からいただきました。」

「そう言わず、持っていきなさい。何かと物入りじゃろう。」

「ありがとうございます。」

「旅など出るのは初めてだろう。」

「そうですね。」

「道中、無事であるよう毎日祈っておる。鬼を退治し、民を安心させて帰ってくるのだぞ。くれぐれも気をつけるようにな。」

「わかりました。」

「では、明日は早い。家に帰って休むがよい。」

「はい。気をつけて行ってまいります。」

「門まで見送ろう。」

二人は無言のまま、門まで来た。照山和尚も正直不安であった。武芸の心得もなく、旅の経験もない算慈。いくらサスケがあるからといっても一人で鬼退治できるのか。

「では、和尚様。」

「うむ、気をつけてな。」

算慈は一礼して、家路についた。

その晩、算慈はなかなか眠れず、夜八時半（午前三時）には出発の支度が済んでいた。算慈は細長い筒を大事に持ち、外に出た。まだ真っ暗で寒い。日本橋へまず向かう。あとは街道沿いを歩いていけば今日中には戸塚に着くだろう。暗がりの中、勘を頼りに日本橋へ向かう。吐く息は白い。

（私は身寄りのない者。鬼に殺されても悲しむものなどいない。）

時々、筒が光るようになった。まるで、蛍のようだ。人気もないので誰にも怪しまれない。こんな時間、外にいるのは算慈しかいない。筒の光を頼りに足元を見ながら歩いていく。日本橋に近づいた頃、ふと気がつく白い犬が算慈のあとをついてきていた。

「こら、犬。私は何も食べ物を持っていないぞ。ついてくるな。」

算慈は立ち止まり、言った。犬も立ち止まり、算慈の顔を見上げた。

「勝手にしろ。」

算慈は歩き出した。犬もまた、歩き出した。

日本橋に着くと、暁七ツ（午前四時）であった。早い店はもう店を開け、旅人の出発を見送っていた。算慈は簡単な旅道具を揃え、蕎麦屋を探した。犬はまだついてくる。川のそばに蕎麦屋の屋台があり、算慈はそばを頼んだ。犬は算慈の足元に座った。

「わかったよ。おやじ、握り飯を一つ。」

「あいよ。」

算慈は犬に握り飯をやった。犬は嬉しそうに食べた。

（なつかれると困るなあ。）

「ごちそうさん。」

算慈はうつわを返した。

（さあ、鬼退治に出かけるか。）

上方へ向かう旅人に混じり、算慈は歩き始めた。もちろん、犬もついてきた。

富士山がよく見えてきた。あれが、富士山かと感心しながら歩いていると、昼近くになっていた。

（そろそろ茶店があるはずだ。）

振り返ると、犬が遅れてついてきていた。算慈はやれやれと、犬が追いつくのを待った。犬が追いつくと、算慈はしゃがんで言った。

「おい、犬。私は戸塚まで行くんだぞ。ついてくる気か？」

犬は頷いた。

「人の言葉がわかるのか？この犬は。」

犬は再び頷いた。算慈はあきれかえった。

「まあ、いいや。ついてこられるならついてこい。本当の桃太郎みたいだな。」

しばらく歩くと、茶店が見えてきた。

（あそこで昼飯といくか。）



茶店は既に何人かの客が昼餉を食べていた。

「いらっしやい。」

茶店の若い娘が出てきた。

「握り飯を四つ。」

「ありがとうございます。十二文になります。」

算慈は足元に座った犬に握り飯をやった。算慈は握り飯をほおぼりながら、ふと、サスケのことを思い出した。

(もう江戸じゃないから、刀を出していいんだ。)

算慈は細長い筒から布に包まれたサスケを取り出した。心なしか温かい。

(これがサスケか。本当に私に使えるのだろうか?)

サスケを脇に差した。犬が食べるのをやめて、サスケを見た。算慈が気付き、声をかけた。

「この刀がわかるのか?まさかな。」

再び、犬は握り飯に喰らいついた。算慈は立ち上がり、店の主人に尋ねた。

「最近、戸塚で鬼が出るという噂を聞くが、本当ですか?」

店の主人は一瞬戸惑った。

「ええ、お客さん。あまり、言いふらさないでくださいよ。確かに出るそうです。おかげで、近場の旅の客が減って、まいつているんですよ。」

「そうなのか。」

「戸塚の隣町にまで出たそうです。江戸に近づいてくるのでしょうか?」

「近づいてきているのか?」

「そうなんですよ。商売上がったんですよ。」

「ありがとう。」

算慈は店を出て、再び戸塚に向けて歩き出した。急に雲行きが怪しくなってきた。雨がポツリ、ポツリと降り出し、急に強く降り出した。雨宿りをしながら歩いていくと、もうすっかり日が暮れてしまった。周りに人もいない。街道脇に古いお堂を見つけ、算慈はそこで夜を越すことにした。

(いいところにお堂があった。これも仏様のご加護だ。)

古いお堂は所々に穴が開いていて、雨漏りがしていた。

(今日中に戸塚に着くと思ったが無理だったな。)

雨はさらに強くなった。犬も算慈の傍らにいた。すっかり夜が更けて、算慈は疲れもあって眠り込んでしまった。夜、八ツ(午前二時)になり、ぼんやりと声が聞こえてきた。

「算慈殿、算慈殿。」

算慈ははっと目を覚まし、脇差に手をかけた。目の前に中年の男がいた。

「誰だ?」

「私は五郎といいます。算慈殿についてきた犬でございます。」

「あの犬か?」

算慈は辺りを見回した。横に寝ていた犬はいない。

「私は戸塚近くの農村の出でございます。家を鬼に襲われ、鬼の大將、鬼雷丸に呪いをかけられ犬にされました。家族も鬼に……。夜、八ツの時間だけ人間の姿に戻れるのです。どうか、鬼雷丸を倒して下さい。」

さい。そうすれば、呪いが解け人間に戻れるのです。」

「そうだったのか。なぜ、呪いをかけられたのだ？」

「私の娘、お小夜は近隣の村一番の美人の娘と評判でした。鬼の大将、鬼雷丸に連れ去られようとした時に、鬼雷丸に呪いをかけられました。妻は・・・、鬼に喰われました。娘は鬼雷丸に連れ去られ、鬼の住処、鬼岩山というところにいます。鬼雷丸を倒せば、呪いも解けて人間に戻れ、娘を助け出せると思うのです。そして、お小夜のいなづけの直治が、お小夜を救おうと鬼岩山へ向かいましたが、行方知れずになりました。私はその妖刀の不思議な力を感じて、犬の姿のまま江戸にやってきたのです。」

五郎は一気に話した。

「そうか。」

「その妖刀は鬼を切るという刀ではないですか？」

「そうです。寺の和尚から鬼退治へと渡された刀です。」

「私は鬼雷丸の居場所を知っています。どうか、お供をさせて下さい。助けて下さい。」

「わかりました。ただ、私は武芸の心得が何もありません。私一人で倒せるかわかりません。」

「私も力になります。」

「お願いします。」

五郎は身震いしたかと思うと、犬の姿に戻った。不思議な光景だった。

「明日に備えて寝ようか。」

疲れていた算慈と犬は再び眠りについた。

数時間後、算慈はいつも起きる時間に目が覚めた。犬も起き上がった。

「ああ、腹が減ったな。」

算慈がお堂の外に出ると、雨はすっかりやんでいて、雲は去り、薄明かりの朝であった。犬も外に出てきた。

「さあ、行くか。」

算慈たちは歩き始めた。小一時間ほど歩くと茶店があった。

(これは助かった。)

「いらっしやい。お早いですね。」

茶店の娘が出てきた。

「昨夜の雨にやられてね、近くのお堂で寝たんですよ。握り飯とそばを。」

「それは大変でしたね。少々お待ちくださいな。」

娘は店の奥に入っていった。犬が先程から落ち着きがなく、うろうろとしている。

「お主も腹が減ったか。私は残念ながらきび団子は持っておらぬからな。」

娘がそばと握り飯を持ってきた。

「二十文です。」

算慈は二十文渡した。犬に握り飯をやり、算慈は温かいそばをすすった。昨日はずいぶん寒い思いをしたので、心まで温まる。犬は先に握り飯を食べ終わり、歩き出した。算慈は慌ててそばを食べ終え、追いかけていった。

「五郎殿、いったいどうされたのだ？」

犬は街道の脇道へそれる山道へ入っていった。犬は早足で山道を登っていく。算慈はやっと追いついた。

「どうされた？」

犬は振り返り、ついて来いという仕草をした。二刻（四時間）ほど歩いただろうか、犬は急に立ち止まり、臭いをかぎ始めた。

「何かいるのか？」

犬は吠えた。

算慈は辺りを見回した。すると、頭上に羽音がし、異様な雰囲気周囲は包まれた。昼間だというのに、辺りはやたら暗くなってきた。獣の臭いがする。サスケが光りだした。

（もしや、鬼か？）

算慈は心臓をバクバクさせ、柄に手を取った。突然、背後から鳥の羽ばたく音がした。算慈は素早く刀を抜き、振り返った。一羽の鳥がはるか頭上の木に飛び移った。その時、なんとも言えぬ地の底から響き渡るような唸り声を上げ背丈七尺ほどの青い鬼が現れた。

算慈は身震いがした。

犬は激しく吠え、足元に飛び掛った。

算慈はわぁーと、叫び、サスケを振り上げ青鬼にめがけて切りかかった。青鬼は素早くよけ、岩の上に飛び乗った。不意に鳥が青鬼の背後から頭を突いた。青鬼は油断した。犬は青鬼に飛び掛り、青鬼の足を深く咬んだ。その一瞬に妖刀サスケは自ら動くように算慈を動かした。算慈はまるで刀の名人のように青鬼を二度、三度と斬りつけた。青鬼はぐうと唸り、よろめいた。犬は青鬼の足を離さない。鳥が再び飛んできて、青鬼の目を突いた。算慈は身を翻し、さらに青鬼を斬りつけた。青い血しぶきが辺りを染めた。サスケはさらに青鬼の血を求める。算慈は飛び上がり、青鬼の首を落とした。

青鬼の胴体はどさっと倒れ、首が落ちてきた。シュウと音を出し、鬼は消えていった。

算慈はサスケを一振りし、鞘に収めた。興奮がまだ収まらない。

（鬼を倒した！）

犬は喜んだように吠え続けた。

算慈は鞘を握り締め、サスケに感謝した。岩の上に先程の鳥が降りてきた。雉だった。犬はさらに吠えた。

「雉だ……。雉の精、まさか娘のお小夜殿か？」

雉は犬の傍らに降り立ち、再会を喜んでいるようだった。

「よかったな、五郎殿。」

犬は算慈に何度も頭を下げた。

「さあ、行こう。ここは危険だ。」

一行は山を下っていった。

算慈たちが戸塚に着いたのは暮六ツ（十八時）だった。かなり早足で歩いてきたので、さすがの算慈もくたくただった。

戸塚の宿場はひっそりとしていた。算慈はめぼしい旅籠に入った。

「遅い時間にすまぬ。一晚泊めていただきたい。」

「いらっしゃいませ。どうぞ、どうぞ。」

旅籠の女中が出てきた。算慈は草鞋を脱ぎ、女中に足を洗ってもらい、玄関に上がった。犬と雉は旅籠の裏で休んだ。算慈は女中について、二階の一室に案内された。

「お食事はどうされます？お風呂はあいにく終わったのですが。」

「じゃあ、食事を頼む。」

「かしこまりました。」

「聞きたいことがある。」

「何か？」

「戸塚に鬼が出ると聞いたが、まことか？」

女中は慌てた。

「た、ただの噂でございますよ。大丈夫ですよ。すぐにお食事をお持ちいたします。」

女中はそそくさと部屋を出て行った。

(やはり出るようだな。)

算慈はサスケを抜いて傍らに置き、寝転がった。サスケを眺め、昼間のことを思い出した。

(確かにこの妖刀、自ら動こうとした。すごい刀だ。武芸のない私にでも鬼が切れた。)

算慈がうとうとしたすと、女中が夕餉を持ってきた。

「失礼します。」

算慈は起き上がった。女中は算慈の前に膳を置き、出て行った。算慈は温かいご飯で握り飯を二つ作った。膳には野菜の煮物、焼き魚、味噌汁がついていた。温かいものを食べて久々に生きた心地がした。食べ終わると、サスケを持ち、一階に下りた。

「すまぬ、この辺りに湯屋はありますか？」

女中が出てきた。

「はい、この右手、三軒ほど先にあります。気をつけて行ってらっしゃいませ。」

算慈は下駄を借り、外へ出た。旅籠の裏にいた犬と雉に先程の握り飯をやった。

「夜ハツになったら部屋に上がってくるといい。」

犬は頷いた。

「じゃあ、湯屋に行ってきます。」

算慈は女中に言われたように行くと湯屋があった。八文払い、二階へ上がり、サスケを鍵付きの戸棚に入れた。ここも人が少ない。体を洗いに行くと、地元の間人だろうか、話しをしていた。

「夕べは近くの村に赤い鬼が出たそうじゃ。」

「恐ろしい。しかし、最近町にはやってこなくなったな。」

「油断はできんぞ。」

「すみません。」

算慈は話しかけた。

「私は旅の者です。戸塚に鬼が出るというのは本当ですか？」

「おや、旅のお方か？」

中年の男は答えた。

「そうとも。先月までは町にまで鬼が来て、人をさらっていったのだ。最近村によく現れるらしい。お

主も気をつけたほうがいいぞ。」

「ありがとうございます。」

算慈は礼を言って、湯船に入った。もうすぐ湯屋も閉まるのであろう。ちょうどいい湯かげんになっていた。算慈は大きく息をつき、目をつぶり、今までを振り返った。あっという間の二日間であった。犬との出会い、鬼退治、雉との出会い。本当に桃太郎伝説のようだ。

(やはり、鬼は町にも出るようだな。残るは猿か。恐らく、お小夜殿のいいなずけの直治かもしれぬ。どこかで出会うのだろうか。)

「お客さん、そろそろ閉めますよ。」

女将の声に、算慈は慌てて湯船から上がった。

寒い中、旅籠に戻ると宵八ツ(午後八時)であった。旅籠の裏では犬と雉は寝ていた。算慈は部屋に戻ると、布団が敷かれていた。サスケを頭上に置き、布団に入り、すぐに眠った。疲れきっていた。

「算慈殿、算慈殿。」

夜八ツの時間に起こされた。

「五郎殿か。」

目の前に若い美しい娘がいた。

「小夜でございます。今日は危ないところを助けていただきありがとうございます。」

五郎と小夜は頭を下げた。

「いや、私も鬼を倒せるとは思わなかった。このサスケのおかげだ。お小夜殿はどうやって鬼のところから抜け出せてきたのですか？」

「鬼岩山の牢獄に囚われておりましたが、ある日突然、雉の姿になったのです。そして、頭上の岩穴のわずかな隙間から抜け出し、空を飛び逃げ出してきました。江戸の方に不思議な力を感じ、必死で飛んでまいりました。」

「そうか。五郎殿もサスケを感じたのであったな。」

「そうです。」

「なぜ、雉の姿になったのだろう……。お小夜殿のいいなずけの直治殿は？」

「私を助けに鬼岩山にやってきたようです。鬼たちが騒いでいました。でも、その後は……。存じませぬ。」

お小夜はうなだれた。

「そうか。でも、恐らく生きておろう。猿の姿になり、サスケにひかれてやってくるはずだ。明日、鬼岩山に向かおう。五郎殿、ここから鬼岩山までどのくらいかかる？」

「ここからですと、三日くらいかかります。」

「そのうち直治殿にも会えるだろう。お小夜殿も安心なさい。」

「はい。ありがとうございます。」

「では、明日も早く旅立とう。」

「はい。おやすみなさいませ。」

二人はそれぞれの姿に戻り、部屋を出て行った。

暁七ツ（午前四時）の時間であった。突然叫び声があがり、旅籠の主人が部屋に飛び込んできた。

「お客様、お客様！」

「何事だ。」

算慈は飛び起きた。

「鬼が、鬼が町に現れました。早く、早くお逃げ下さい！」

主人は叫んだ。算慈はサスケを握り、立ち上がった。

「鬼はどこにおる？」

「まさか、お客様。」

「鬼退治だ。」

「危険です！」

「居場所を！」

算慈は急ぎ、着替えた。

「湯屋の先を行ったところです。」

算慈は旅籠を飛び出た。犬と雉が待っていた。町の者は騒ぎ、慌てて四方八方に逃げていく。その流れに逆らい、算慈らは湯屋の先に走っていった。

叫び声が聞こえ、バキバキという激しい物の壊れる音がした。背丈、七尺ほどの赤鬼と青鬼が一軒の町屋を壊している。

「待て、鬼ども！」

算慈はサスケを抜き、大声で叫んだ。

鬼たちは振り返り、ぐうと唸った。

（二体の鬼か。サスケを信じよう。）

算慈は走り出し、赤鬼に向かってサスケを斬りつけた。があと声を出し、赤い血が噴き出した。犬は青鬼の足を深く咬み、動きを止めた。雉は何度も青鬼の頭や顔をつついた。

赤鬼は手を振り回し、算慈を叩き潰そうとした。算慈は巧みによけ、サスケで二度、三度と斬りつけ、よろけたところで首をはねた。赤鬼はシュウと音を立て、消えた。サスケは鬼の血を味わっているようだった。

青鬼は犬を振りほどき、地面にたたきつけた。犬はキャンと鳴き、動かない。算慈はうわぁと声を上げ、青鬼に斬りつけた。既に片目を失った青鬼は動きが遅い。やみくもに腕を振り回している青鬼に算慈は隙をみて飛びかかり、青鬼の首をはねた。青鬼はシュウと音を立てて消えていった。

算慈は息を荒くして、犬に駆け寄った。

「五郎殿、大丈夫か？」

犬は軽くうなづき、よろよると立ち上がった。雉は急いで飛び降りてきて、犬の傍らに寄り添った。

算慈はサスケについていた鬼の血を振り払い、鞆に収めた。サスケは熱くなっている。鬼の血を喜んでいようだった。

壊された町屋の住人は、裏口から逃げていったようで誰もいなかった。辺りが静かになったので町人が様子を観に戻ってきた。真っ先に旅籠の主人が駆け寄ってきた。

「お客様、もしや、本当に鬼退治をされたのでしょうか？」

「ああ。」

まだ、算慈の息は荒かった。

「ありがとうございます。ぜひ、この町にとどまって鬼退治をお願いします。宿賃は要りません。」

「いや、主人。私は鬼の住処の鬼岩山へ旅立つところだ。」

「あの鬼岩山へ……。本当ですか？」

「ああ。危険でございます。あの山には何百という鬼が住むといわれています。おやめ下さい。」

「何百もか。いや、大丈夫だ。私は鬼退治のために、旅立ったのだ。」

「そうでございますか。それではお引止めはしませぬ。これほどの力をお持ちの方でしたら、必ずや鬼を退治してくれるでしょう。町のものとして応援します。うちで朝餉をとって、腹ごしらえしてからお出かけ下さい。」

主人と算慈は町人に囲まれながら旅籠へ戻った。

朝餉は豪華な内容であった。朝餉がすむと、町の豪商が来て、金品を算慈に渡そうとしたが、算慈は固辞した。

「気持ちだけいただいております。」

町の豪商は、その態度にも深く感銘を受けた。

「鬼退治が無事終られた際にも、ぜひ戸塚にお立ち寄り下さい。歓迎いたします。」

「わかりました。」

「本当にありがとうございました。」

豪商は深く礼をして、部屋を出て行った。旅籠の主人は弁当を用意してくれ、多くの町人が見守る中、算慈らは出発した。

「五郎殿、鬼岩山に案内してくれ。」

犬は頷き、先導した。

「お小夜殿、鬼が何百といるのはまことか？」

算慈は少し不安になった。サスケは確かに素晴らしい力を持っている。しかし、この人数で何百と鬼を倒せるのものか？

雉は降りてきて、首を振った。

「そうか、安心した。」

戸塚の町を出て、街道を上方へ向かった。昼九ツ（正午）あたりになり、休憩することにした。木陰で旅籠の主人が用意してくれた弁当を開けた。豪華な中身である。うなぎの押し寿司に、甘いお菓子もついていた。算慈も食べたことのないお菓子であった。犬と雉と分けて食べても充分、満腹になりゆっくりと休んだ。

「五郎殿の村にも案内してほしいが、今日中に着くか？」

犬は頷いた。

算慈は連日の鬼退治に正直疲れていた。もう少し休みたかったが、そうとも言ってられない。算慈らは道を進んだ。

やがて、街道から脇へそれる道に入った。戸塚からだと二刻（四時間）ほどだった。まっすぐ半刻ほど進むと、野菜畑が見えてきた。村に近づいてきたのだろう。農民が野菜の手入れをしている。この辺りで

作った野菜は戸塚に持って行って売られるのだろう。やがて、大きな集落が見えてきた。何軒か壊された家がある。犬が駆け出した。算慈もついていく。

（五郎殿の村だろうか？）

村に着いた。この村は周囲の村よりも大きそうな村だ。ちょっとした店もある。

犬は半壊になった家の前で吠えた。雉も家に入っていく。村人が声を掛けてきた。

「その家は鬼にやられたよ。何か、用かい？」

「ここは五郎殿の家か？」

「ああ、そうだ。知り合いか？」

算慈は頷いた。

「五郎の娘は鬼にさらわれてしまったよ。五郎はいなくなった。嫁さんと一緒に喰われてしまったのかもな。」

「そうか、ありがとう。」

算慈は壊れた家に入った。犬と雉がうなだれていた。

「辛かったな、二人共。大丈夫だ、奥方の敵は討とう。」

犬と雉は算慈を見上げた。

もう辺りは薄暗くなってきた。近くの茶店でそばを食べ、再び家に戻ってきて壊されていない部屋の隅の方に横たわった。

「また、夜八ツに起こしてくれ。話しを聞こう。」

まだ、家の中をうろうろとしている犬と雉に言い、算慈は眠った。

「算慈殿、算慈殿。」

算慈は夜八ツに起こされた。人間の姿になった五郎とお小夜がいた。

「五郎殿、お小夜殿、大変であったな。」

「はい。」

「母上は私を守るために・・・。」

お小夜は泣き出した。五郎はお小夜の肩を抱いた。

「そして、娘をさらっていこうとした鬼雷丸に、私は呪いをかけられました。お小夜は村一番の美しい娘と評判なので狙われたのかもしれませんが。」

お小夜は泣き続けている。五郎は続けた。

「本当でしたら、今月、戸塚の商家の直治殿のところへ嫁入りするはずでした。襲われたあと、私は犬となって途方にくれて村にいました。戸塚からたまたま直治殿が我が家に来て、村人の話しを聞き、鬼岩山へ向かったということです。」

「そうか。」

「その後の直治殿の行方はわかりません。私は江戸の方にその妖刀を感じ、江戸に向かったということです。」

「直治殿は無事でしょうか？」

お小夜は顔を上げた。

「大丈夫だ、お小夜殿。桃太郎伝説のように、猿に姿を変えてこの妖刀を感じて近づいてくるはず



だ。」

算慈はサスケに手をやった。

「明朝、鬼岩山へ向かおう。」

「わかりました。」

「じゃあ、寝るか。」

「はい。おやすみなさいませ。」

三人は眠りについた。

朝になり、村の茶店でそばを食べた。

「近頃、この村に鬼は出るのか？」

算慈は茶店の主人に尋ねた。

「五郎さんの家がやられてからは現れなくなりました。」

「そうか、ありがとう。弁当用に握り飯を四つ包んでくれるか？」

店の主人は頷き、店の奥に入っていった。算慈は犬に言った。

「よかったな、五郎殿。お主の村は今は安全なようだ。」

犬は頷いた。

「直治殿の臭いは感じられるか？」

犬はしばらく辺りを嗅ぎ回してきたが、首を振った。

「そうか、直治殿は今頃どこにいるのだろうか？」

算慈はしばらく考え込んだ。

「やはり、直治殿も鬼岩山に向かったのだから、鬼岩山へ向かおう。臭いが残っているかもしれない。」

再び、五郎の家に戻った。犬は辺りを嗅ぎ回り、やがて歩き出した。算慈はついて歩いた。どうやら隣村に向かっているようだった。広い野菜畑が広がっている。

途中、出会った農民に五郎と直治の話聞いた。この辺りでは有名な話だった。直治の行方は皆、話がばらばらであったが、鬼岩山に向かう前にその村にある伝庄寺という寺に立ち寄ったらしい。算慈たちは伝庄寺に向かうことにした。伝庄寺は山のふもとにあるらしい。途中、小川のほとりで弁当を食べたが、直治の臭いはまだしなかった。

昼八時半（午後三時）に伝庄寺に着いた。村を見下ろす位置にある。寺の小僧が和尚へ話を伝えると、和尚は歓迎して寺に入れてくれた。

「こんな時間に、お話を伺いに来て申し訳ありません。」

寺の座敷に通してもらった算慈は伝庄寺の和尚に言った。

「いや、構わないですよ。私は順正といいます。」

初老の順正和尚は言った。算慈は今までの経緯を話そうとした。

「犬と雉はどこにおるのじゃ？」

「え？」

「私には、少々霊力があましてな。」

「寺の外で待っております。」

算慈は何もかも見透かされているようで、急に怖くなった。

「恐れなくてもよい。お二人とも、中へ。」

「はい。」

算慈はいったん部屋を出て、寺の外で休憩していた犬と雉を呼んだ。二人共驚いたが、和尚の部屋にやってきた。

「順正和尚様、ありがとうございます。では、改めてお話させていただきます。」

算慈は今までの経緯を話した。順正和尚は黙って聞いていた。

「そうか、鬼退治か。立派なことじゃ。うちの村でも鬼に襲われておる。幸い、死者は出ておらぬが、何軒か家は壊され怪我人もおる。田畑も荒らされた。何とかならぬかと思っていたところじゃ。」

「私も最初は鬼退治などできるかわかりませんでした。このサスケのおかげで自信がつけました。必ずや、鬼退治をしてまいります。」

「その刀には大変な霊力が備わっておる。鬼の大将、鬼雷丸でさえ斬ることができるであろう。」

「そうですか、安心しました。あと、直治殿の話を知りたいのですが。」

「直治殿は、五郎殿の家が襲われた翌日、私の寺にやってきたのじゃ。自分で言うのもなんじゃが、この辺りでは霊力のある僧として名が知れていてな。五郎一家の話を知りにきたのじゃ。」

順正和尚は雉を見た。

「五郎さんは呪いをかけられたが、お小夜さんはまだ生きておられると話したら喜んでおった。それから、どうしても鬼岩山へ助けに行くと申ししたが、とりあえずその晩は寺に泊まってもらい、一人で行くことを考え直してもらった。しかし、翌朝、一人で鬼岩山へ行ってしまったのじゃ。」

「直治殿は鬼岩山に来られたそうです。お小夜殿が申しおりました。」

「そのようじゃのう。」

「直治殿は無事ですか？」

「ああ、大丈夫なようじゃ。」

雉は泣いているようだった。

「よかったな、お小夜殿。」

「ただ、直治殿も呪いをかけられたようじゃ。」

「猿にですか？」

「恐らく。」

「やはり、そうですか。今、どこにいるかわかりますか？」

順正和尚は考え込んだ。

「近くの山の中にいるようじゃ。何か引っかかる。鬼も一緒におるようじゃ。」

「鬼も？」

「ああ、おとりにしているのかも知れぬ。充分、気をつけるのじゃよ。」

「はい、気をつけます。サスケを持っているので出会えるでしょうか。」

「そうじゃな。その刀の力にひかれてやってくるはずじゃ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「今夜は泊まっていきなさい。旅の疲れも出ておろう。ゆっくり休むがいい。」

「ありがとうございます、順正和尚様。お世話になります。」

その夜、算慈は久しぶりにゆっくりと寝ることができた。やはり、算慈は寺で育ったので寺の匂いに安心する。その晩、算慈は不思議な夢を見た。

算慈は満開の桜を見ていた。辺り一面に桜が咲き誇り、町人たちも花見に来ている。暖かい風が吹いている。ふと気がつくと、桜色の着物を着た色が白く美しい女性が桜を見上げていた。お供の女性と微笑んでいる。

あまりの美しさに算慈は言葉を失い、立ちつくしてしまった。

また風が吹き、桜の花びらが舞う。美しい女性の髪に花びらがつき、お供の女性が花びらをとっている。ふと、算慈と目が合った。算慈はふらふらとその美しい女性に近づいていった。女性は恥ずかしそうにうつむいた。

「名はなんと言う？」

算慈は思わず声をかけてしまった。

女性は恥ずかしそうにうつむいたまま答えない。算慈の刀を見てから、算慈の顔を見た。そのあまりの美しさに算慈は息が止まった。

お供の女性が言った。

「加代様でございます。」

「そ、そうか。加代殿か。私は算慈といいます。」

算慈はこれ以上何を言っているのかわからなかった。

また、そよ風がふいた。

加代は立ち去ろうとした。

「加代殿、待ってください。住まいはどちらですか？」

「向島でございます。」

「そうですか、いいところですね。」

算慈はそう答えるのが、やっとだった。

加代は桜のように美しく柔らかい笑顔を残し立ち去っていった。

算慈は目が覚めた。とても心が安らいでいる。

「加代殿か……。」

何かこの夢が正夢のような気がした。将来の妻かもしれない。このたびが終わったら向島に加代を探しに行こうかと思うほどであった。ただし、生き残っていたらだが……。

寺で朝餉もごちそうになった。算慈はとても幸せな気持ちだった。そんな算慈の様子に、順正和尚も気付いた。

「算慈殿、何かよい夢でも見たのか？」

「はい。桜一面の夢を。」

「旅が終わったら、ぜひ行ってみるがいい。」

「順正和尚様は何でもお見通しですね。」

「でも、その前に大きな仕事がお待っている。気を引き締めることじゃ。」

「はい。順正和尚様。」

算慈は気を引き締め、出発の支度をした。

「算慈殿は身分の高い出じゃな。」

順正和尚が言った。

「え？」

「理由があって、捨てられたのじゃな。」

「なぜ、それを・・・？」

「算慈殿には武士の血が流れておる。武芸の心得がなくても、本能で鬼退治ができるのじゃ。この旅が終ったら、自分の出生を探すといいだろう。」

「私に武士の血が・・・。」

「ああ、後は自分で探しなさい。」

「はい。ありがとうございました。お世話になりました。」

算慈はあつく礼を言って寺を出た。

「では、鬼岩山に向かおう。案内を頼む。」

犬が先導し、鬼岩山への山道を歩き始めた。昼九ツ（正午）を過ぎた頃、伝庄寺で作ってもらった弁当を食べて休憩した。ふと、雉が飛び立った。

「お小夜殿・・・。」

しばらく待っていると、慌てて雉が戻ってきた。ついてこいという仕草をしている。算慈らは急いで雉の後を追った。山の細い道を登っていく。気がつくとき暗雲が立ち込めてねっとりとした空気が周囲を包み込んだ。

（鬼がいる。）

算慈は直感で思った。ふと、足元を見ると血の痕が点々と続いている。嫌な予感がして小走りで血の痕を追った。しばらくすると、猿が倒れていた。

「直治殿か？」

算慈は駆け寄り、血にまみれた猿を抱きかかえようとした瞬間に、わき腹をつかまれ吹っ飛ばされた。算慈の口から血が流れ、周りを三匹の鬼に囲まれていた。畏だったのだ。

サスケを抜き、目の前にいた赤鬼に斬りつけた。しかし、先程の衝撃で体が思うように動かない。その時、犬が赤鬼の足に噛み付きバランスを崩した。サスケが動き、算慈は赤鬼の首をはねた。赤鬼はシュウと言って消えた。青鬼が犬をつかもうと算慈に背中を見せた時に、背後から斬りつけた。雉が加勢する。青鬼は振り返り、算慈に向き直った。もう一匹の鬼が算慈に襲いかかった瞬間、青鬼も飛び掛ってきた。算慈はしゃがみこみ、青鬼の両足を切り落とした。が、もう一匹の赤鬼に頭をぶたれた。両足を失った青鬼はひっくり返し、ぐあーと叫んだ。算慈はよろめきながら、赤鬼に構えた。雉が赤鬼の頭上をつつきながら飛んでいる。犬は赤鬼の足に噛み付く。算慈はわあーと叫んで、サスケを思い切り振って赤鬼の体を両断した。赤鬼もシュウと音を出して消えた。算慈はもがいている青鬼に飛びかかり、首をはねた。青い血しぶきが辺りを染めた。

キー

雉の鳴く声が聞こえた。算慈が振り返ると、ひときわ大きな、そして異臭を放ち他の鬼とは明らかに違う気を持った鬼が雉をわしづかみにしていた。犬が慌てて駆け寄っていく。その鬼は背丈が10尺（約三メートル）ほどある。漂う妖気が明らかに違う。周囲の空気が張りつめる。その鬼は雉をわしづかみにしたまま、走ってきた犬を蹴飛ばした。犬は木に当たり、動かない。算慈は襲いかかる恐怖心と戦い、肩

で息をしながら、サスケを鬼に向けた。

「貴様がサスケ使いか。」

鬼は地の底から響くような声で言った。

算慈は何も答えず、鬼を睨み返した。

「こいつはいただいていくからな。」

巨大な鬼が立ち去ろうとした。

「待て！」

算慈は声を振り絞って叫んだ。

鬼は振り返った。

「お前が鬼雷丸か。」

「そうだ。だったら、なんだというんだ。」

「ならば、斬る！」

算慈は勇気を振り絞って、鬼雷丸に斬りかかった。サスケが光り輝く。今までよりも何倍も早く動く。しかし、むなしく空を斬る。雉を盾にとって、鬼雷丸が避けるのだ。

「卑怯者！お小夜殿を離すのだ。」

算慈はなお、斬りかかる。その時、鬼雷丸はグッとって片ひざをついた。不意をつかれ、犬が足首に噛みついたのだ。算慈はその隙に飛びかかり、鬼雷丸の左目を斬った。どす黒い血が飛び散る。鬼雷丸はぎゃあと叫んだ。

「このサスケ使いめ。覚えている！」

鬼雷丸は左手で算慈をなぎ払い、走り去っていった。算慈は木にぶち当たり、意識を失った。

気がつくと、犬が算慈のほほをなめていた。算慈は飛び起きた。

「鬼雷丸は？」

辺りを見渡したが、鬼の気配はもうない。もうあたりは暗くなり始めていた。

「そうだ、直治殿は？」

算慈と犬は道端に倒れている猿に駆け寄った。血まみれになっているが、かろうじて息はしている。そばの小川で体の血を流してやった。左肩に大きな傷があった。算慈は持っていた手ぬぐいで左肩を縛ってやった。猿はようやく目を開けた。

「直治殿か？大丈夫か？」

猿は再び目を閉じてしまった。夜が訪れた。満月の月明かりだけが頼りだった。山道をしばらく登っていくと、古ぼけた小屋があった。中を覗いてみると、もう今は使われていない木こりの小屋のようだった。

「助かった。今夜はここに泊まろう。」

算慈は猿を抱えたまま小屋に入った。とたんに、強烈な眠気に襲われすぐに寝入ってしまった。

夜八ツになって、五郎の声にはっと目を覚ました。

「直治殿は？」

人間の姿に戻った直治を見た。若々しい青年だ。

「肩の傷は大丈夫ですか？」

「はい、なんとか。助けていただいてありがとうございます。」

「よかった。直治殿、一体何があったのですか？」

直治は今までのことを話した。伝庄寺から一人鬼岩山に向かい、鬼の住処の洞窟へ忍び込んだが、すぐに鬼雷丸に見つかり猿の呪いをかけられ、石牢に閉じ込められた。ある日、鬼雷丸が来て、お小夜に雉の呪いをかけてあるものを探し出そうとしたが、うまくいかない。逃げ切られたようだ。今度はお前をおとりに使って、お小夜とあるものを探すからついて来いと言われ、左肩を斬られた。そして、鬼岩山の近くに来た算慈殿をおびき寄せたようだ。あるものとは妖刀サスケのことらしいそうだ。

「そうか、伝庄寺の順正和尚が言っていた気をつけるというのはこのことだったのだな。夜が明けたら、早速鬼岩山へ向かおう。」

「お小夜は大丈夫でしょうか？」

五郎は心配そうに言った。

「鬼雷丸は我々をおびき寄せるために、生かしておろう。大丈夫だ。直治殿は、傷のこともあるのでここで待たれよ。」

「いえ、私も連れて行ってください。足手まといにはなりません。鬼の住処の中も知っています。」

直治の目は真剣だった。

「わかりました。傷のことがあるので無理しないで下さい。では、夜が明けたら。」

三人はすぐに眠りについた。

外が白み始め、やがて算慈は目を覚ました。犬は既に起きており、算慈について来いという仕草をした。猿はまだ寝ている。算慈は小屋の外に出た。昨夜とは違い、静寂に包まれた朝であった。犬は近くの草むらに入り込み、ワンと吠えた。算慈があとを追うと、濃緑の草が茂っていた。犬は草をむしり、小屋へ向かった。

「そうか、薬草か。」

算慈も草をむしり、小屋へ戻った。石で草をすりつぶし、猿の傷口に塗った。猿は痛そうにしたが、おとなしく薬草の汁を塗られていた。そして、算慈らは出発した。途中、小川の水でのどを潤し、昨夜、鬼雷丸に傷を負わせた場所まで戻ってきた。犬は臭いをかぎ、歩き出した。二刻ほど歩いたころであろうか、辺りは暗くなり始め、犬は立ち止まった。行く先に木が一本も生えていない岩山が見えた。

「あれが鬼岩山か。」

サスケが光り始めた。鬼の血を欲しているのか。鬼岩山に近づくにつれ、蒸し暑さで息苦しくなってきた。猿が先導し、洞窟の入り口に向かったが、鬼の気配はない。妖しい霧に包まれた洞窟にそっと忍び込むと、中は光苔が所々光っていた。異様なくらい静かであった。算慈はいつでもサスケを抜けるように柄に手をかけながら歩いた。鬼の気配は全くない。

キー

雉の鳴き声が奥から聞こえ、鳴き声に向かって算慈らは走り出した。岩がむき出しの通路を抜けると大きな空間についた。

地の底から響く声がした。

「やっと来たか、待っていたぞ。」

天井からかすかな光が差し込み、鬼雷丸が一人大きな岩の上に座っていた。手には雉を持ち、逆さ吊りにしている。

「お小夜殿を離すのだ。他の鬼はどうした？」

「貴様など、わし一人で充分だ。」

猿は不自由な体で鬼雷丸に向かっていった。犬も続き、算慈もサスケを抜き、続いた。猿は鬼雷丸のそばの岩に飛びのり、鬼雷丸に飛びかかる機会をうかがった。

「お小夜殿を離せ！」

サスケを構え、算慈は叫んだ。

「出て来い！桃太郎。積年の恨み晴らしてやる。」

鬼雷丸は叫んだ。算慈は意味がわからなかったが、サスケは光り輝き、りんとした声が響いた。

「鬼雷丸、お前によってこの刀に封印されし、この魂。今こそ、解き放そう。いざ、勝負じゃ。」

「望むところだ。」

サスケは意思を持ち、算慈を動かした。鬼雷丸は岩から降り、雉を盾にとって距離を縮めてくる。

「算慈殿、共に闘おう。」

サスケから声がした。

猿が鬼雷丸の右腕に飛び掛った。思い切り噛み付き、雉の方へまわりついていく。

「ええい、うっとうしいわ。」

鬼雷丸は左手で猿をつかみ、地面に叩きつけられた。雉も地面に叩きつけた。犬は鬼雷丸の足に噛み付いた。鬼雷丸は足を振り払い、犬も壁に叩きつけられた。鬼雷丸はじりじりと算慈に近づいてくる。

鬼雷丸は昨日、算慈に左目を斬られて見えなくなっている。算慈は左側へ動いていく。先に手を出したのは、鬼雷丸のほうだった。サスケはぐうんと動き、鬼雷丸の左腕を切り落とした。ぎゃあ、と鬼雷丸は叫び、右腕で算慈を突き飛ばした。算慈は壁に叩きつけられ、思わずサスケを手放してしまった。鬼雷丸は算慈の手を踏みにじった。

「これでサスケを握れまい。」

算慈の頭に手を振り下ろそうとした時に、猿がサスケを算慈に投げ渡した。算慈はサスケをうまく受けとりよろよると立ち上がった。鬼雷丸は算慈にのしかかってこようとした。算慈は血まみれになった手で、サスケを持ち替え、のしかかってくる鬼雷丸の右目を突いた。鬼雷丸はのけぞり、目を両手で押さえ、倒れこんだ。算慈はよろめきながら、鬼雷丸を斬りつける。しかし、ほかの鬼のように簡単には斬れない。

その時であった。

鬼雷丸が順正和尚に姿を変えた。

「何？」

算慈は手を止めた。

「算慈、だまされるな。やつの手だ。斬れ！」

サスケは叫んだ。しかし、算慈は動けない。順正和尚は痛みのにた打ち回っている。

「順正和尚……。」

算慈が駆け寄ると、次は育ての親、照山和尚に姿を変えた。

「この親不孝ものが！」

算慈はあとずさった。

「これがやつの手で算慈も呪われるぞ。この刀で首をはねるのだ。恐れるな！」

サスケが言った。

「私には照山和尚は斬れない。」

「だまされるな、算慈。」

犬が吠え、算慈ははっと我に返った。

両目を失った照山和尚はのた打ち回っている。もし、本物ならという思いがよぎったが、サスケの言葉を信じた。サスケを振り下ろした瞬間、

「石にしてやる！」

鬼雷丸は叫んだ。

算慈の足先が、石に変わっていく。算慈は迷いを捨て、照山和尚の首を切り落とした。

辺りが静寂に包まれた。

さっという音がして、照山和尚の体が鬼雷丸の体になり、鬼雷丸の頭蓋骨を残し、砂となって消えた。

(鬼雷丸を倒したのか・・・)

激しい風がふき、砂が吹き飛ばされ、鬼雷丸の頭蓋骨が残った。

算慈の足は元通りに戻った。はっと、辺りを見回した。

「五郎殿、お小夜殿、直治殿。」

三人は人間の姿に戻り、倒れこんでいた。

サスケが光り輝いた。

「よくぞ鬼雷丸を倒してくれた、算慈。私は桃太郎。鬼雷丸に私の魂をこの刀に封印された。今、解放される。そなたでなければ、鬼雷丸は倒せなかった。」

「なぜ私が・・・。」

「そなたは私の魂を引き継ぐもの。鬼雷丸を倒した今、私も眠りにつける。ありがとう。」

サスケの光はゆっくりと消えていった。算慈はサスケを鞘に収めると、鬼雷丸の頭蓋骨を手にとった。

「算慈殿。」

直治はようやく立ち上がった。

「先ほどは助かった。大丈夫ですか？」

「はい、何とか。」

直治は五郎とお小夜に駆け寄った。二人は意識を取り戻したようだった。その時、天井がガラガラと崩れ始めた。

「危ない！脱出するぞ。」

算慈は直治の肩を抱き、来た道を急いで引き返していった。崩れ落ちてくる石にぶつかりながらも、四人は何とか洞窟を脱出した。

その日の夕刻遅くに、四人は伝庄寺に着いた。順正和尚は四人を歓迎した。

「鬼の気配が消えたと思ったら、やはり算慈らが鬼雷丸を倒したのであったな。」

「皆のおかげです。」

「そなたがサスケに選ばれしものだったからじゃよ。それは鬼雷丸の頭の骨か？」

「はい。こちらで供養してもらおうかと思い。」



「まかせなさい。さあ、四人とも今夜はゆっくり休むがいい。」

直治は肩の治療をしてもらい、四人は夕餉を食べた。それから、五郎たちは倒れこむように寝たが、算慈はなかなか眠れず、布団から抜け出て縁側に座った。

月の美しい夜であった。

(私がサスケに選ばれしもの。私は一体何者なのだ。)

算慈はもう光らないサスケをさすり、月を見上げた。この前、伝庄寺に泊まった時に見た夢の中で、出てきた「加代」をふと思い出した。江戸に戻ったら「加代」を探そう。算慈は急に眠気に襲われた。

翌朝、鬼雷丸の頭の骨は供養され、四人は順正和尚に礼を言い、伝庄寺をあとにした。五郎の村につくと、鬼退治のうわさはまたたく間に広まり、村人たちは安心した。算慈は五郎の村に泊まっていくように勧められたが、算慈は急いでいた。三人に別れを告げ、村をあとにした。

江戸に戻る途中、戸塚の旅籠に泊まり、鬼退治を報告した。主人は喜んで、宴会を開いてくれた。

翌日、算慈は日本橋に夕七ツ(午後四時)に着いた。

(帰ってきた。)

そのまま、大徳寺へ向かい観人和尚に会った。

「よくぞ、無事に戻った算慈。」

観人和尚は歓迎し、部屋に通した。

「サスケに助けられました。鬼雷丸の骨は伝庄寺というお寺で供養してもらっています。」

「そうか。」

算慈はサスケを観人和尚に渡した。

「サスケは無事役目を終えたようじゃな。」

「桃太郎の魂が宿っているとサスケは話しました。」

「うむ。算慈がサスケを受け取った時に光ったであろう。あれは選ばれしものという証拠だったのだ。」

「なぜ私のようなものが……。」

「算慈の出生に秘密があるのかもしれないな。まあ、夕餉でも食べて行きなさい。」

「ありがとうございます。でも、今日のうちに照山和尚様に会いありがとうございます。今日はサスケをお返しするだけにしておきます。」

「わかった。じゃあ。サスケは受け取っておく。照山和尚にもよろしくな。」

「はい、ありがとうございました。」

観人和尚は門まで見送った。

小一時間ほど歩き、辺りが暗くなり始め、見慣れた秀徳寺に戻ってきた。もう一年は時が過ぎたように感じた。照山和尚が算慈が帰ってきたのを知って、駆け寄ってきた。

「算慈！よくぞ無事で。」

「照山和尚様。」

算慈は鬼雷丸が照山和尚になりすましたときを思い出したが、こうやって無事に生きているのを見て安心した。

「そうか、鬼を無事退治してまいったか。さあ、夕餉を食べて行きなさい。話しを聞こう。」

照山和尚の部屋に通され、一緒に夕餉を食べながら今までのいきさつを話した。伝庄寺で見た夢の

「加代」のことも話した。

「加代……。はて、聞いたことはないぞ。」

「そうですか。明日、向島に行ってみようかと思うのですが。」

「ああ、行ってくるといい。寺子屋の方はしばらく私がみておるから、心おきなく探してくるのじゃ。」

「ありがとうございます、照山和尚様。では、失礼します。」

算慈は照山和尚に礼を言って、秀徳寺をあとにした。通り慣れた道を歩き、もう日の落ちた裏長屋に戻ってきた。やっと自分の家に戻り、安心したのかそのまま倒れこむようにして眠ってしまった。

「納豆～。納豆。」

納豆売りの声に算慈は目を覚ました。体中が痛い。疲れが出たのであろう。算慈は外へ出た。

「おや、先生。戻ってらしたんですか？」

井戸端にいた女たちが集まってきた。

「はい。昨夜、戻ってきました。」

「旅に出たと聞いていましたが、どこへ行ってらしたんですか？」

「子供たちが心配してましたよ。」

女たちは次々と聞いてきた。算慈は返答に困って、厠へといってその場を離れた。厠を出ると今度は子供たちに囲まれた。

「先生、どこに行ってたの？」

「おみやげは？」

「早く、寺子屋で教えてよ。」

「いつから、教えてくれるの？」

やはり、裏長屋での生活がいい。にぎやかだ。算慈はしばらくしてから寺子屋に戻るからと言って、家に戻った。大切にしまってあった絹の産着を取り出した。しばらくの間、産着を眺めてから風呂敷に包み、家を出て向島へ向かった。

向島に着くと、茶店で「加代」と言う女を知らないか聞いてまわった。何軒かまわったある茶店で、その主人が心当たりがあると言った。

「もうずいぶん昔になりますが、その呉服屋さんの娘さんで加代さんという人はいましたよ。どこだったろうね、お殿様に見染められて妾になりましたが……。」

「そうですか、ありがとうございます。」

算慈は今度こそ、手がかりがつかめたと思い、茶店の主人が言った呉服屋に行った。

「すみません。」

「いらっしゃいませ。」

手代が出てきた。

「ちょっとお尋ねしますが、ここに加代さんがいらっしゃたそうで。」

手代は一瞬戸惑ったが、少々お待ちくださいと言って店の奥に入っていった。番頭らしき男が出てきた。

「何か御用で？」

「ここにいた加代さんについて聞きたいのですが。」

「失礼ですが、どちら様で？」

「あ、失礼しました。私、秀徳寺の寺子屋で教えている算慈というものです。この産着に見覚えはありますか？」

算慈は絹の産着を見せた。番頭は驚いた。

「少々お待ち下さい。」

番頭は再び、奥に戻り、しばらくして戻ってきた。

「どうぞ、おあがりください。」

算慈は中へ通してもらった。客間で茶を出された。しばらく待っていると、店の主人が入ってきた。

「産着を持っているとかで。見せてもらえますか？」

主人は挨拶もそこそこに産着に興味を示した。しげしげと産着を眺めた。

「これをどこで？」

「実は私、捨て子でして、この産着を着ていたそうです。」

主人は考え込んだ。

「この産着は確かにうちの商品です。商品というか、孫のためにあつらえたものです。加代のことをどこで知りましたか？」

「それが、その・・・夢で。」

「夢で？」

「はい。桜の美しい時期でした。大変美しい方で、お供の方を連れていました。私が声をかけると、向島の加代とだけ申ししておりました。それで、向島に来て加代さんを探しにきたというわけです。」

主人は立ち上がり、奥方を呼んだ。奥方はやってきて、算慈の顔を見て息をのんだ。主人の横に座り、算慈の持ってきた産着を手にとって泣き出した。

算慈は訳がわからず、戸惑ってしまった。

「申し訳ないが、算慈さんとやら、背中を見せてくれぬか？」

「背中ですか？はい、失礼します。」

算慈は着物をはだけ、背中を見せた。算慈は知らなかったが、背中に大きなほくろがあった。

「やはり・・・。」

主人と奥方は顔を見合わせた。

「算慈さん、加代は私たちの娘でした。」

「でした、というと？」

「もう、この世にはおりませぬ。加代は岡山藩主池田正範に見染められ、妾になりました。一人、子をもうけましたが、井戸に身を投げ自害しました。子の行方はわかりません。正妻に殺されたと言われていて。その産着は子が産まれた時に私共があつらえたものです。」

「その産着をあなたが着てらしたのですか？」

奥方は涙を流した。

「はい。二十五年前、春の早朝に生後半年ほどの頃に、秀徳寺の前にこの産着を着て捨てられていました。」

「加代の面影があるのと、先程見せていただいた背中にある大きなほくろが確かな証拠かもしれない。」

「ほくろ？」

「ええ、このことは私たちしか知りません。」

「徳上丸生きておったか・・・。」

「徳上丸？」

「そうです。それが本当の名前です。加代は徳上丸を産んで半年後に自害しました。池田氏と正妻の間に世継ぎがおりませんでした。江戸に参勤交代に来た時に加代を見染めて、妾にしました。そして徳上丸を産み、正妻の息がかかったものが徳上丸を殺そうとしたようです。加代は徳上丸の身を守るために、寺に捨てたのかも知れぬ。」

算慈は加代が母であることを受け入れようとした。母は自分を守るために、自分を捨て自害をした。父は岡山藩主池田正範。そして目の前にいるのは祖父と祖母である。やっと自分の身内を見つけたのであった。

二人は算慈の手を取り、泣いた。

「戻ってきてください、この家に。」

奥方が言った。

「待ってください。私は自分が誰か知りたかっただけで。」

「お願いします。加代の敵を討ってください。」

算慈は秀徳寺に戻ってきて、照山和尚と話していた。

「そうか。そういう訳じゃったのだな。で、どうする？」

「私は・・・。帰り道考えていましたが、算慈として生きていきたいです。」

「算慈は岡山藩主の跡継ぎになれるのかもしれないんだぞ。」

「私は自分の出生がわかればよかったです。それで充分です。今の生活に満足しています。どうかこのまま算慈として生かして下さい、照山和尚様。」

「わかった。算慈が岡山の武士の血が流れておったのじゃな。それで、サスケが反応したのか。算慈が今の生活を望むなら今のままでいい。皆が待っておるぞ。」

算慈は急いで寺子屋の教室に向かった。

「先生！」

「寺子屋に戻ってきたの？」

「待ってたよ、先生！」

算慈は子供たちに囲まれた。

「ああ、ただいま。」

算慈はようやく自分の居場所を見つけることができた。